

令和7年10月16日(木)



1年生が技術の授業で取り組んでいる木工は、3Dキヤドによる作図が終わり、材料取り図に進んでいます。生徒に用意されたのは、無垢の杉板。600mm×150mm×10mmが2枚、600mm×60mm×10mmが1枚です。この板材から、必要な材料を切り出していきます。木目を意識し、且つできるだけ無駄なく切り出すためには、きちんと計算する必要があり、結構苦戦している生徒が多く見られます。材料取り図が完成したら、先生にチェックして



もらい、いよいよ材料のけがきです。けがき（野書き）とは、材料に加工位置や切断線、穴あけ位置などを書き込む（刻みつける）作業のことです。本来は、けがき針で材料の表面をひかくように線を刻み込みますが、今回は、失敗しても消せるようにシャープペンシルでけがきを行います。そして、けがきに欠かせない道具の一つに差し金があります。直角をうまく使うことで正確なけがきができます。

2年生の理科は、生物の体のつくりとはたらきについて学んでいます。本時は、「体が刺激を受け取ってから反応するまでの時間」を実験しました。クラス全員34名＋教頭先生が手をつないで輪になります。スタートの生徒が隣の人の左手を握ったら、握られた人は右手を握ります。そうやって、次々に手を握っていき、一周回った時間を測定します。実験は、全部で3回行いました。1回目は25.14秒、2回目は13.06秒、3回目は8.99秒でした。慣れてくるにしたがって、どんどんタイムは短縮していき、みんな歓声を上げました。さて、8.99秒とはどれほどの速さであると評価できるのでしょうか。8.99秒を35人で割ると、一人当たりの平均反応速度は、およそ0.26秒です。これは、速い？遅い？



陸上競技の100m走のスタートでは、0.14秒が標準的な反応速度です。0.12秒なら好スタート、0.16秒なら遅いと判断されます。ちなみに、0.10秒未満のスタートは、フライングと判定され失格になります。理由は、ヒトの反応速度として0.10秒未満はあり得ないからだそうです。